

宇宙開発史んぶん

http://www.geocities.jp/uchyuu_kaihatsu_shi/

2005年11月号(第11号)

ヴォストーク遺聞<3> 江藤巖 ガガーリン替え玉説

あらかじめお断りしておくが、今回の話、あまりぱっとしたものではない。むしろ情けない話と言えよう。ガガーリン、ヴォストーク、糸川英夫と道具立てだけは立派だが、内容はないようなものだ。

いまから十数年前の産経新聞、正確な日付は覚えおらず、冷戦終焉前か後かも朝刊か夕刊かも記憶が定かではないが、1ページを費やす大きな記事が載った。「ガガーリンは替え玉だった？」とか言う派手な見出しで、ロケット博士こと糸川英夫がユーリイ・A・ガガーリンが実は宇宙を飛んではない、ヴォストークに乗って地球を周回したのは別人だったのではないかと唱えていると言った内容だった。

見出しに惹かれて読んでみて、呆果てた。論理も考証もない。糸川の個人的印象を基に組み立てた妄説だったのだ。失望のあまりその新聞紙は捨ててしまった。取っておけばと学会で話の種くらいにはなっただと思うと残念だ。

糸川が、ガガーリンは替え玉だったと主張する根拠は三つあるようだ。

- (1)ガガーリンが1962年5月に来日したとき、糸川もインタビューすることが出来たが、なんとも覇気がなく、とても世界的偉業を達成した人には見えなかった。
- (2)技術的なことを質問しても曖昧な答えしか返さず、とてもヴォストークに乗った人とは思えなかった。
- (3)ガガーリンは1968年3月に飛行機事故死したところになっているが、偽者とばれそうになったので抹殺されたのではないかと。

(3)については、わざわざ反論するまでもないだろう。この種の陰謀論のお約束の展開である。実際には死亡の事実が先にあって、後からその人が死んだ(殺された)理由を当て推量する類の論法である。死んだ人はなんらかの秘密を握っていたとするのは、容疑者がすべての罪過は死んだ共犯者にあると主張するのと似たようなものだ。

(1)も別におかしなことではない。ガガーリンの来日は世界28カ国を親善訪問するソ連の外交政策の一環で、日本に来たときには実際かなり疲れていたのだろう。毎日のように歓迎攻めにあい、記者会見やインタビューのたびに同じような質問をされれば、いい加減やる気がなくなってもしかたないだろう。

(2)についても理由ははっきりしている。ソ連の宇宙飛行士達は、技術的に詳細な質問に答える権限がなかった。たとえば彼等が誠実に答えようとしても、通訳の名の下にKGB(国家保安委員会)から派遣されて来ている監視役が適当にお茶を濁した。

ガガーリンではなく、G・S・チトーフのエピソードだったか、アメリカを訪問した際に記者会見で「ヴォストーク2にカメラを持ち込んだか？」と質問された。チトーフは即座に「ダー」と答え、通訳が「ノー」と訳した。アメリカ人の記者でも、ロシア語の「はい」と「いいえ」くらいは知っている。

当時ソ連は、ヴォストークで偵察活動を行っているとの非難を大変警戒していて、宇宙船にはカメラは装備されていないと主張し続けていた。しかし隠蔽があまりにあからさまで、笑い話になってしまった。

糸川ガガーリンとの会談がどのような形で行われたかは知らないが、必ずKGBが立ち会ったはずだ。ガガーリンにその気があったとしても、とても技術的な質問に詳細に答えられた状況ではない。

ところで、ガガーリンが替え玉であったと主張する場合、次の三つのケースが考えられる。

- (a)ヴォストークで飛んだのが本当のY・A・ガガーリンで、恐らく帰還時の事故で死亡。代役に立てられたのが世間の知っているガガーリン。
- (b)ヴォストークで飛んだのはもともと別人。ガガーリンは最初からプロパガンダ要員として待機していた。
- (c)ヴォストークには実は人間は乗っていなかった。ガガーリンはプロパガンダ要員。

産経の記事がこの三つのケースのどれを主張していたのか、むかしのことと記憶が定かではない。そもそもこの三つを分けて論じていたかどうかとも怪しい。

「替え玉」と言う言葉で一番普通に連想するのは(a)のケースだろう。そうであったら、我々がガガーリンとして知っている人物はほんとうは別の名前で、本物のガガーリンは1961年に死んでいることになる。

初めから失敗すると分かっているミッションに人間を乗せるのはいくらなんでも無駄だから、ソ連側は成功を信じてガガーリンを送り出したのだが、残念なことに結果は悲劇に終わり、急遽別人を替え玉に立てたということになるのか。それとも万一の失敗に備えて、初めから代役を用意してあったのか。

しかしいくらソ連が社会主義国でKGBの恐怖支配体制にあったとしても、本物のガガーリンの存在を抹殺することと、代役のガガーリンの正体を隠蔽することの両方を、完璧に遂行できたとはとても思えない。

それぞれの親戚や知人が何十人何百人もいたはずで、その誰かが「おいらの知ってるユーラはあんな奴じゃねえ」とか、「ありゃあおらの村のゴンベコフの息子のイワンじゃねえのか」とか言い出したりしたらどうなるのか。

「ヴォストーク宇宙船」(風虎通信「宇宙の傑作機 8」)にも書いたように、ソ連はヴォストークがまだ軌道を回っている間に、有人宇宙飛行が成功したこと、乗員の名はユーリイ・アレクセーエヴィッチ・ガガーリン空軍少佐であることを公表している。糸川はこの事実を知った上で、替え玉説を唱えたのだろうか？

この時ガガーリンの写真まで一緒に公表されたかどうかまでは調べがつかなかったが、いずれにしろ帰還前の発表にはソ連の自信が伺える。もしも着陸前にガガーリンの顔写真まで公表されていたのなら、替え玉はガガーリンの双子の兄弟であったか、卓越した整形手術の賜物と言うことになるのか。

(b)や(c)の主張であったなら、本物のガガーリンの存在を抹消する手間は必要なくなる。(b)の場合は、ほんとうに飛んだ

人間の業績を抹消するのは不自然だろうが、例えば宇宙飛行士としての腕前は優れていても思想的には問題があった、とか考えられないではない。ただ(a)同様にいろいろと危ない橋を渡らねばならないのは確かだ。

いずれにしても、このガガーリン替え玉説、そんなに深い考察にも、事実の考証にも立脚していたようには思えず、単なる思い付き、悪く言えば妄想の産物と見えた。

糸川英夫は、日本の宇宙開発の礎を築くにあたって大きな貢献を果たした。糸川なくして日本の宇宙開発なし、と言っても良いくらいである。

しかし功績は功績として、晩年の糸川が科学技術から離れていわゆるトンデモに傾斜し、それどころか精神を病んでいたのではないかと思えるような話もいくつもある。このガガーリン替え玉説も、糸川の糸の切れた想念が生み出した仮構でしかなかろう。(おわり)

異常事態発生！ ソユーズ32号飛行士 苦闘の175日

1979年2月25日にウラジミール・リャホフとワレリー・リュエミンを乗せたソユーズ32号がサリュート6号とのドッキングを目指して打ち上げられた。この飛行の任務はそれまでの長期宇宙滞在、ソユーズ29号の飛行士が作った139日の記録更新であった。ソユーズ32号は翌26日にサリュート6号とドッキングに成功した。この日から彼らはさまざまな宇宙実験を行い長期飛行記録に挑戦することになる。

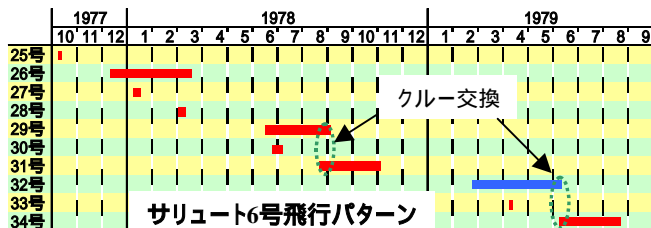
ここで当時のソ連の有人宇宙プログラムを振り返ってみる。ソ連は前後にドッキングポートを持つ第2世代の宇宙ステーション、サリュート6号を1977年12月19日に打ち上げた。それまでの宇宙ステーションはドッキングポートが1つしかなかったため宇宙船は1機しかドッキングできず飛行士が滞在中の間の他の飛行士の訪問や物資の補給が行えず長期飛行には限界があった。しかしサリュート6号からは2つのドッキングポートが使えるようになり飛行中の物資の補給が可能となり飛行記録を大幅に伸ばすことが可能となった。ソ連はサリュート6号を打ち上げて以来長期飛行記録の更新を目標に有人宇宙開発を行うことになる。

またサリュート6号からソ連は新しい飛行パターンを作った。それは長期滞在ミッションと短期滞在ミッションの2つのタイプの併用、つまり長期滞在ミッション中に1週間程度の短期滞在ミッションを入れるパターンだ。この短期滞在ミッションには以下の目的がある。

- 1: 長期滞在クルーの精神的ケア
- 2: 物資の補給
- 3: 飛行士の養成
- 4: ソユーズの交換

長期滞在中に特に4番目が非常に重要な意味を持つ。当時のソユーズ宇宙船の宇宙滞在保障期間は約3ヶ月であった。そのため3ヶ月以上の長期滞在中には帰還用に新しいソユーズが必要となる。短期滞在クルーを打ち上げそのクルーは長期滞在クルーが乗ってきたソユーズで帰還し長期滞在クルーは新しいソユーズで帰還するというやり方である。この方法はその後も続けられ現在のISSにも引き継がれている。ちなみにこのような短期滞在クルーは“タクシークルー”と呼ばれている。

この短期滞在ミッションは1978年1月10日に打ち上げられたソユーズ27号で初めて行われた。



前年12月10日に打ち上げられサリュート6号とドッキングしていたソユーズ26号と軌道上での世界初の宇宙船3重連結に成功した。しかしこのときはソユーズの交換は行わなかった。その後も3月2日に打ち上げられたソユーズ28号がサリュート6号・ソユーズ26号とドッキングしているがこのときもソユーズの交換は行われていない。まずは短期滞在ミッションの実験を行うと言う意味での飛行だったようだ。このあたり一歩一歩着実に進めると言うソ連の宇宙開発の姿勢が見て取れる。実際にソユーズの交換が行われたのは次の長期滞在ミッションのときである。1978年6月15日に打ち上げられたソユーズ29号に乗った長期滞在クルーが8月26日に打ち上げられたソユーズ31号のクルーとソユーズの交換を行ったの初めてであった。この交換によりソユーズ29号のクルーは139日の長期滞在記録の更新が可能となった。

ちなみにソユーズは帰還時の着陸ショックを少しでも和らげるため飛行士の体に密着した各飛行士専用の座席シートがある。ソユーズを交換する場合はこの専用座席シートを交換する必要がある。ISSのシャトルで打ち上げられる長期滞在飛行士は緊急帰還用に自分専用のソユーズ座席シートを持っていく。

さて、話をソユーズ32号に戻す。サリュート6号とドッキングして約2週後の3月9日、無人貨物船プログレス5号がドッキングした。これにより長期滞在中のための物資の補給を受け今後のミッションの準備が整った。

彼らが早急に行わなければならなかった仕事にサリュート6号の燃料タンクの修理があった。サリュート6号は燃料タンクに故障が発生して燃料漏れを起こしていたのだ。32号の飛行士は地上での練習を何度も行い、軌道上で見事に修理を行った。

そして4月11日、彼らは短期滞在ミッションのソユーズ33号を待っていた。宇宙空間で四六時中2人で生活することは非常にストレスがたまる。小説家オー・ヘンリーは「殺人を犯させるには2人の男を小部屋に2ヶ月閉じ込めるだけでよい」と言っているほどである。そういう状況下の彼らに短期滞在クルーの訪問は精神的に大きな助けになるのだ。そして何より長期滞在クルーに取って最も重要な帰りのソユーズを持ってきてくれるはずになっていた。ソユーズ32号のクルーはサリュートからソユーズ33号の接近を観察していた。そのとき突然33号に異変が起こった。33号の噴射するエンジンの色が変わったのである。33号のエンジンにトラブルが発生したことは明らかであった。地上からの指令で急遽ドッキングは中止、32号は緊急帰還することになった。このとき33号は通常行われる大気圏突入時のGの比較的小さな揚力降下ではなく8Gもの力のかかる弾道降下で帰還している。

33号がドッキングに失敗しサリュートに取り残された32号の飛行士は大きなショックを受けた。楽しみにしていた同僚以外の人の交流、彼らが持って来る事になっていた家族や友人からの手紙や新鮮な食品などのうれしいお土産。それらが全部

なくなったのである。しかし一番の問題は帰還のためのソユーズであった。この時点ではまだ宇宙滞在時間が1ヶ月半しかたっていないため32号は宇宙滞在保障期間内であるためにすぐにでも地上に帰れるはずであった。しかし33号のエンジントラブルで同じ型のエンジンを搭載している32号も安全性に問題が出たのである。帰りに帰れない宇宙の孤児となってしまったのだ。地上では今回のエンジントラブルの原因究明及び対策を行ったソユーズの出来るだけ早い打ち上げの計画が立てられた。

宇宙に残された彼らは不安でいっぱいだった。この問題に関して彼らに出来ることは何も無かった。彼らに残された方法は2つ、すなわち絶望するか笑って事実から目をそらすかだ。彼らは後者を選び何も無かったように宇宙での実験や作業に再び取り掛かった。

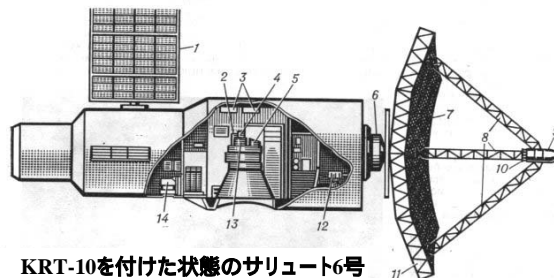
ソユーズ33号の件からちょうど1ヶ月後の5月11日、プログレス6号が到着した。補給物資の積み下ろしを行いプログレスの余分な燃料でサリュートの軌道押し上げるなどした。

6月に入るとソユーズ32号は既に宇宙滞在保証期間を過ぎた状態となった。もし何らかの事故や病気・怪我などの緊急事態で帰還の必要が生じて32号では無事に帰還できる保証が無いという状態だ。そういう状況下のもとエンジンに改良が加えられた救助船、ソユーズ34号が無人で6月7日にやっと打ち上げられた。無人のソユーズはプログレスを開発する時にソユーズ20号で打ち上げられておりサリュートとのドッキングも実績はあった。

6月8日にそれまでドッキング状態であったプログレス6号を分離しソユーズ34号のドッキングの準備が進められた。そして34号はサリュート6号後部ドッキングポートに無事ドッキングを成功させた。32号のクルーはこれで安心して宇宙での任務を果たすことが出来るようになった。

34号の到着で役目を終えた32号は別の任務が与えられた。まずトラブルの可能性があるエンジンの実験、そして宇宙滞在保障期間を過ぎた影響の確認、最後にうまく帰還できたときの為にステーションの荷物の地上への持ち帰りである。そして6月14日ソユーズ32号はドッキングを解除、軌道離脱後無事カプセルは帰還した。ソユーズ32号が去った後それまで後部にドッキングしていたソユーズ34号を前部ドッキングポートに移動させた。これは次のプログレスの為に後部ドッキングポートを空けるためだ。

6月30日プログレス7号がドッキングした。7月15日この日はソユーズ29号の飛行士が作った139日の飛行記録を超える日であった。そして予定では後1ヶ月宇宙に滞在することになった。7月18日プログレス7号のドッキングを解除した。このときドッキング装置にはKRT-10と呼ばれる直径10mの自動展開式パラボラアンテナがセットされておりプログレスの離脱とともに展開する仕掛けになっていた。KRT-10の展開はプログレスのテレビカメラから確認されパラボラアンテナの展開が正常に行われた。クルーは残り1ヶ月の大半をこのKRT-10を使って地上の70mのアンテナを持つクミア電波天文台と連携しての天文実験を行うことになる。8月9日ほぼ予定の任務を終えたクルーは帰り支度をすることになった。KRT-10は次の宇宙船ドッキングの為に切り離すことになった。サリュートからの切り離しの信号が送られた。アンテナを支えていたワイヤーのフックがはずれスプリングで自動的に切り離される様になっていた。しかしアンテナは横に傾いたまま止まってしまった。切り離し失敗である。クルーはすぐに姿勢制御用のスラスタを使いサリュートをゆずってみたがアンテナは外れなかった。



KRT-10を付けた状態のサリュート6号

長い滞を終えてようやく帰ろうかというときのトラブルである。この日から問題解決の為に地上スタッフとともに解決策が色々協議された。取るべき道は2つだった。1つは何もせず予定通り帰還する。もう1つは何とかしてアンテナを除去する。

もし何もしない場合、もしかしたら十分に訓練された次のクルーが来てアンテナを除去してくれるかもしれない。しかしアンテナがついたままでは姿勢制御に問題が出る恐れがありソユーズがドッキングできなくなる恐れが出る。そうなればもはや打つ手が無くサリュート6号は廃船になってしまう。

しかしアンテナを除去するにしても問題は多い。まず船外活動がどう見ても必要になってくる。今回のミッションにはもともと船外活動は予定されていなかった。もちろん不測の事態も考えて船外活動の訓練は行われてはいただろうが通常の船外活動を行うクルーのように徹底した訓練はしていなかった。つまりはぶっつけ本番である。また宇宙服はサリュートにはあったが2年前のクルーが使ったきり整備もされていなかった。さらに体力と精神力の問題も懸念された。長期宇宙滞中で体力が落ちさらに心は既に地上に戻りつつあるクルーに今回の任務が務まるのか？また無重力状態での巨大アンテナの挙動もまったく分からない状態であった。

地上スタッフはクルーに判断を任せた。そして彼らはアンテナを除去する事を決めた。8月15日船外活動が行われることになった。その間宇宙服の点検・修理、そして飛行士自身の健康チェックを行った。

船外活動当日、まず帰還時に地上に持って帰る荷物をソユーズに入れた。最悪場合無人でソユーズを地上に帰すためであった。そして船外活動が始まった。EVAハッチはサリュート前方、問題のアンテナは後方にある。無重力の中端から端まで移動しなければならない。やっとの思いでアンテナの所までたどり着きアンテナをチェックする。どうも揺すった程度では取れそうも無い。リューミンがワイヤをカッターで切断することにした。そして1本のワイヤを切断した時アンテナがリューミンの方向に傾いてきた。リャホフの叫びで何とかアンテナをかわした。残りのワイヤもカットして最後は長い棒でアンテナを押すことでやっとアンテナの除去に成功した。この日はリューミン40歳の誕生日でもあった。

8月19日すべての任務を終えたウラジミール・リャホフとワレリー・リューミン2人のクルーはソユーズ34号で宇宙滞在175日の新記録を携え無事帰還した。

編集後記

今回は江藤さんのヴォストーク遭難(3)と私のソユーズ記事。久しぶりのソ連物だったので張り切りすぎて1ページに収めるつもりが2ページになって書き終えた時にどっと疲れてしまいました。来月はもっと楽しようと思ってます。(笑)